

地域学習における児童の 意識変化に関する基礎分析

井形 康太郎¹・田中 尚人²

¹学生会員 熊本大学大学院 自然科学教育部土木建築学専攻 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1)
E-mail: 186d8352@st.kumamoto-u.ac.jp

²正会員 熊本大学准教授 熊本創生推進機構 (〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1)
E-mail: naotot@kumamoto-u.ac.jp

現代の地域コミュニティには、地域住民の地域に対する関心の低さという課題がある。解決には、地域に対する愛着と誇りという意味のシビックプライドの考え方が必要である。この考え方の醸成のきっかけとして、小学校で取り込まれる地域学習が位置づけられる。本研究では、熊本市内にある向山小学校を対象に、地域学習によって児童に起きる、地域に対する意識の変化の構造とその行程を明らかにすることが目的である。児童の好きな風景の絵や理由と10年後の校区をこうしたいという設問の回答を、共起ネットワークやクラスター分析などを用いて分析した。その結果、地域学習を通じた他者との関わりが地域に対する意識の変化を生むことが分かった。

Key Words : regional study, civic pride, student's area image, others

1. はじめに

(1) 背景・目的

現代の地方部では、就業機会の不足や地方の魅力の低下などが原因となり、都心部への人口流出という課題に直面している。さらに、転出超過などで人口流出に歯止めがかからず、衰退の恐れのある自治体は「消滅可能性都市」と呼ばれ、重大な社会問題となっている。

地方部に限らず、都心部でも同様に、自治会や町内会の弱体化といった地域コミュニティの衰退や、人間関係の希薄化などの課題もある。

そしてこれら課題の根底には、「住民の地域に対する関心の低さ」という大きな課題がある。地域に対して無関心な住民が増えることが、無縁社会に繋がり、前述した様々な課題の進行を加速させる恐れがある。

これらの課題の解決には、「地域に対する愛着と誇り」という意味であるシビックプライドの考え方が重要となる。このシビックプライド醸成のきっかけとして、小学校中学年で取り込まれる地域学習が位置づけられる。

そこで本研究では、熊本市内にある向山小学校を対象校とし、地域学習によって児童に起きる、地域に対する意識の変化の構造とその行程を、児童から回収した宿題や振り返りシートの分析を行い、明らかにすることを目的とする。

(2) 既往研究と位置づけ

地域学習に用いられた教材についてや教材の提案に関する研究として、菊池²⁾、鈴木ら³⁾の研究が挙げられる。これらの研究では、教材を評価し、効果について考察している。

また、地域学習とシビックプライドに関する研究として、田中ら⁴⁾の研究が挙げられる。この研究の対象となったのは、いくつかの学習手法が有る中の「まち歩き」だけに着目したものであった。

以上より、地域学習に用いられた教材や教育手法に関する論文は見られる一方、その教材を使い得られた児童の成果物に着目し、また、1年間の地域学習全体を通して児童の意識の変化に着目した研究は見られない。よって、本研究の新規性を見出すことができる。

(3) 向山小学校の概要と地域学習について

熊本市立向山小学校は、熊本県熊本市中央区本山に位置し、創立140年を超える全校生徒528人の小学校である。

平成29年度に向山小学校で行われた地域学習は6年生を対象としており、タイトルは、「まごころ町民になろう『向山のよさを見つけよう』」と題しており、図-1の年間計画で実施された。

そして、様々な学習の中でも、児童の地域の捉え方が分かる「校区の好きな風景」と、児童が考える地域ビジ

4月	校長先生からの歴史の授業
5月	校区巡り
6月	大人へのインタビュー
7月	
8月	校区の好きな風景を探す
9月	中間発表会←振り返りで10年後の向山校区について考えた
10月	校区巡り
11月	地域の人に向山校区についてインタビュー
12月	グループに分かれ、地域に関わり、地域について調べる
1月	
2月	
3月	最終発表会

図-1 地域学習の年間計画

ンが分かる「10年後の向山校区はこうしたいと考えたこと（以下、10年後こうしたい）」という質問に対する児童の回答，以上2つから，意識変化を分析する。

そして，実際に児童たちが学校に提出したプリントを回収した。授業に参加できなかったなどの理由で全員分を回収することができなかったが，本論文では，「校区の好きな風景」と「10年後こうしたい」を比較，分析するため，両方を回収することができた65名を対象とする。

2. 児童の地域の捉え方に関する分析

本章では，夏休みに行われた「校区の好きな風景」を対象として，児童の地域の捉え方を明らかにするために，KJ法，共起ネットワーク，クラスター分析を用いて分析した。

(1) 分析対象について

夏休みの宿題として，好きな風景の場所名，その絵または写真，好きな理由を書いてもらった。また，校区の好きな風景を表すために，先生から，写真を撮影するか，絵を描くかの明確な指示はなかったが，写真を撮影した児童が25名，絵を描いた児童が40名であった。

(2) KJ法による分析

場所や好きな理由を考慮せず，写真や絵の視覚的な情報だけで判断し，似通った風景をグループ化し，筆者と指導教員の2名でKJ法を用いて図化した。

KJ法とは，データをグループ分けし，グループごとの関係を図解化し，そこから新たな発想を生み出す研究法のことである。結果を図-2に示す。

視覚的な情報で，学校，遊び場，家，神社，町の様子，

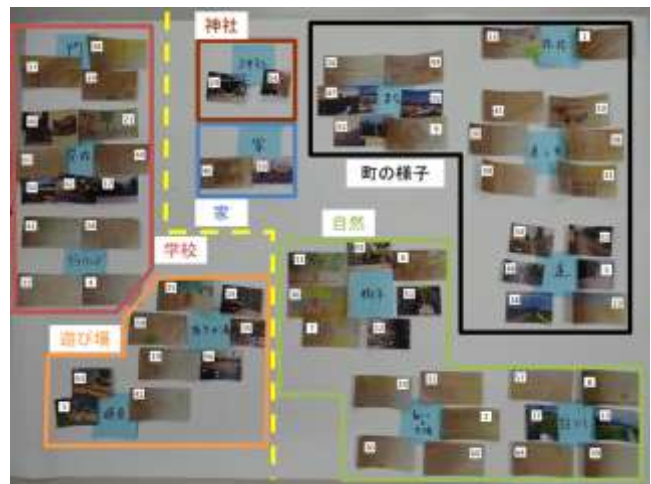


図-2 KJ法の結果



図-3 居場所として捉えている風景と
対象として眺めている風景の違い

自然の6つのグループに分かれることが分かった。また，これらを，さらに大きく分けると，図-2の点線部分で，居場所として捉えている風景と対象として眺めている風景に分けることができると考えられた。居場所として捉えている風景と定義した理由は，風景と児童の関係が読み取れ，日常性を有し，その風景の中で長い時間を過ごすことが考えられるからである。このことから，居場所として捉えている風景を描いた児童は，風景を自分のものと捉えていると推測でき，それに23人の児童が該当した。一方，対象として眺めている風景と定義した理由は，単純な景色として読み取れる絵や写真が多く，風景と児童との関係がはっきりしないためである。このことから，対象として眺めている風景を描いた児童は，自分事よりは他人事のように捉えていると推測でき，42人の児童が該当した。

(3) 共起ネットワークによる分析

前節のKJ法では，視覚的な情報に基づいて分析をしたが，好きな理由に基づいて分析するため，共起ネットワークの作成を行った。共起ネットワークとは，文章を特徴づける単語を抽出し，その単語間の共起関係をネットワーク図に示したものである。そして，テキストマイニングソフトKHcoderを使用し，分析を行った。最小出現数を3，描画数を60として，共起ネットワーク図を作成した結果，表-1の共起関係があることが分かった。

表-1 共起ネットワークによる分析の結果

考えられた風景の種類	得られた共起関係
人とのつながりを表す風景	人-元気-笑顔-挨拶-嬉しい →地域の人とのつながりを連想できる
児童の思い出と風景	河川敷-自転車-練習-遊べる-公園 →児童の経験や思い出が校区の好きな風景に繋がっている
感情を生み出す風景	心-忘れる, 落ち着く, 楽しい →見たり, その場に居ることによって何かの感情が生まれる風景が好きな風景に繋がっている

(4) クラスタ分析

前節まで行ったKJ法と共起ネットワーク分析との関係を確認するためにクラスタ分析を行った。クラスタ分析とは、似ている組み合わせから順番にクラスタ（まとめ）毎に分類する分析方法である。本論文では、ウォード法を用いてクラスタ分析を行った。

その結果、表-2の5つのグループに分けられることが考えられた。また、視覚的な情報と理由からの情報を比較すると表-3のようになる。

「遊び場のグループ」と「学校のグループ」と「町の様子のグループ」では、理由からの情報と視覚的な情報の相関が見られることが分かった。しかし、「町の様子と自然のクラスタ」では、自然と分かるものが少なかったことから、町の風景の写真や絵から自然の要素は見つけられなかったが、理由の文章から初めて自然が読み取れたということが考えられる。

表-2 クラスタ毎の特徴及び名前

A	「遊び場」と「自然」の理由が多く含まれていた。よって、「遊び場と自然のグループ」とする。
B	「樹木」と「自然」の理由が多く含まれているが、他のクラスタと比べると、唯一「遊具」の理由が含まれていた。よって、「遊具のグループ」とする。
C	唯一、「グラウンド」の理由が含まれていた。「学校」や「遊び場」の理由も多く含まれている。よって、「学校のグループ」とする。
D	「町」と「道」の理由が多く含まれており、「自然」も多く含まれている。よって、「町の様子と自然のグループ」とする。
E	Dと同様に「町」の理由が多く含まれていたが、「自然」は全く含まれていない。よって、Dと区別するため、自然は含まない単純な「町の様子グループ」とする。

表-3 理由からの情報と視覚的な情報の比較

理由からの情報 (共起ネットワーク, クラスタ分析)	視覚的な情報 (KJ法による分析)
遊び場と自然のグループ	自然と分かるものは多いが、遊びと分かるものは少ない
遊具のグループ	学校、遊び場と分かるものが多い
学校のグループ	学校と分かるものが多い
町の様子と自然のグループ	町の様子と分かるものは多いが、自然と分かるものは少ない
町の様子グループ	町の様子と分かるものが多い

さらに、「遊び場と自然のグループ」では、遊び場と分かるものは少ないことから、写真や絵から判断した自然の風景には、遊び場に関する理由が多くあったことが考えられる。

3. 児童の考えた地域ビジョンに関する分析

本章では、9月に実施した中間発表後の振り返りシートでの、「10年後の向山校区をこうしたい」という設問に対する回答を、共起ネットワーク、クラスタ分析を用いて分析した。

(1) 分析対象について

平成29年9月26日に向山小学校の体育館にて、中間発表会が行われた。その翌日に児童たちは中間発表会の振り返りを行った。そこで、「『10年後の向山校区はこうしたい』とあなたが考えたことを書いてみましょう。」という設問に回答してもらい、その回答を分析した。

(2) 共起ネットワークによる分析

2章と同様に共起ネットワーク分析を行った結果、「絆-深い-助け合う」や「人-地域-協力」という人とのつながりを連想できる共起関係が見られた。このことから、児童にとって人とのつながりが地域を構成する重要な要素であることが考えられる。また、「事故-起きる-犯罪」や「道-少ない-暗い-街灯」などの地域の安全・安心が連想できる共起関係が見られた。このことから、地域の安心・安全が児童の考える地域ビジョンに必要な物であると考えられる。さらに、「地震-忘れる」という共起関係が見られた。これは、平成28年の熊本地震が児童の考える地域ビジョンに影響を与えているということが考えられる。

(3) クラスタ分析

似通った地域ビジョンを持つ児童同士をまとめ、児童の考える地域ビジョンの特徴を明らかにするため、クラスタ分析を行った。この結果、6つのグループに分けることができた。また、児童の回答の文末に着目した。文末のパターンは、2つあることが分かった。1つ目は、

表-4 グループに能動的な回答が含まれる割合

グループ名	能動無し	能動有り
町の安全・安心を考えるグループ	60%	40%
町・地域の賑わいを考えるグループ	59%	41%
今と比較した町と校区を考えるグループ	83%	17%
校区の緑と遊び場を考えるグループ	48%	52%
笑顔溢れる校区を考えるグループ	75%	25%
地域の子どもを中心に考えるグループ	14%	86%

どちらかと言うと他人事と捉えられ、能動的でない文末である。「～になって欲しい、～になったらいい、～な町、～な校区」などの文末である。2つ目は、自分事として捉えられる能動的な部分が見られる文末であり、「～な町にしたい、～にしていきたい」などの文末である。この2つの文末のどちらに当てはまるかを基準に判断した結果、能動的な文末を書いた児童が30人、能動的でない文末を書いた児童が35人いたことが分かった。

表4から、地域の子ども達を中心に考えるグループには、能動的だと受け取れる文末を書いた児童が多い事が分かった。このグループに属している児童は、10年後に大人になった自分の地域の中での立場を考え、自分が地域の一員だと自覚した児童が多かったと推測できる。

4. 児童の意識変化の要因に関する分析

(1) 意識変化の内容

地域を自分事に捉えているかに着目すると、図4のように、自分事と捉えている児童が増加したことが分かる。

(2) 意識変化の要因

8月から9月の間の夏休みで、地域住民や保護者などの大人を対象としたインタビューを行ったことが変化の要因だと考えられる。これまで、小学生の視点で地域を見ていたが、インタビューにより、大人の視点での地域を知ることができたからである。児童には考えつかなかった意見が聞け、それが地域の考え方に影響したと考えられる。

このように、他者との関わりで得ることができた地域に対する考えが児童の考え方に変化をもたらしたと考えられる。そして、この意識の変化が重要である。地域に対する意識の変化が、学習を行った成果となり、これからの地域との関わり方において影響を及ぼすことになると考えられる。

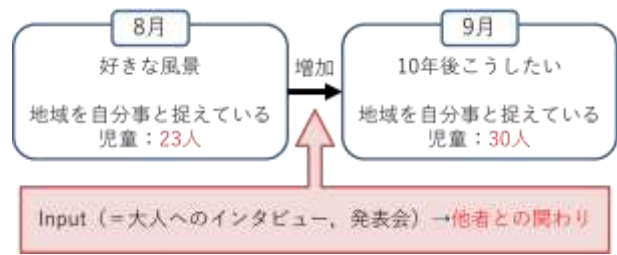


図4 自分事と捉えている児童の増加とInputの関係

参考文献

- 1) シビックプライド研究会：シビックプライド都市のコミュニケーションをデザインする，宣伝会議，2008.
- 2) 菊池八穂子：当事者意識を育てる小学校社会科地域学習の単元開発—第3学年小単元「農家の仕事」を事例として—，名古屋学院大学論集人文・自然科学篇第53巻第2号 pp107 - 124，2017.
- 3) 鈴木亜弥，長尾徹：地域学習を支援する地域教材の提案—千葉県四街道市の地域カルタ「よつかるた」の提案—，日本デザイン学会第57回研究発表大会，2010.
- 4) 田中尚人，堀尾和美：小学校地域学習におけるシビックプライド涵養に関する実践的研究，実践政策学第2巻1号，2016
- 5) 川喜田二郎：発想法創造性開発のために，中公新書，1967.
- 6) 引地博之，青木俊明：地域に対する愛着形成の心理過程の検討，景観・デザイン研究講演集 No 1，2005.
- 7) 山本銀兵，加納誠司：「地域への愛着」形成過程に関する一考察—「町探検」の実践分析を通して—，愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 vol. 1 pp17-25，2016.
- 8) 西上広貴，上月康則，山中亮一，尾野薫，平川倫：ふるさとのために活動する学生の特質について—「愛着」，「誇り」，「避けたい」感情に着目して—，景観・デザイン研究講演集 No13，2017.

STUDY ON THE CHANGE OF STUDENT'S AREA IMAGE IN THE REGIONAL STUDY

Kotaro IGATA and Naoto TANAKA

In modern ages, local community has a problem of low interest in community development of hometown. In recent years, regional study which is tackled at elementary school is regarded as important as a trigger of cultivating civic pride meaning attachment and pride for the region. The purpose of this research is to clarify the structure and process of the change of student's area image occurring in the student by regional study for the sixth graders of Kouzan Elementary School in Kumamoto City. Specifically, it is analyzed the student's work on the subject "My favorite landscape" and the subject "I want to do this school district after ten years" using the KJ method, co-occurrence network analysis, cluster analysis, etc.

As a result of the research, it turned out that the involvement with others through regional study brought about a change of student's area image that actively touches the region.